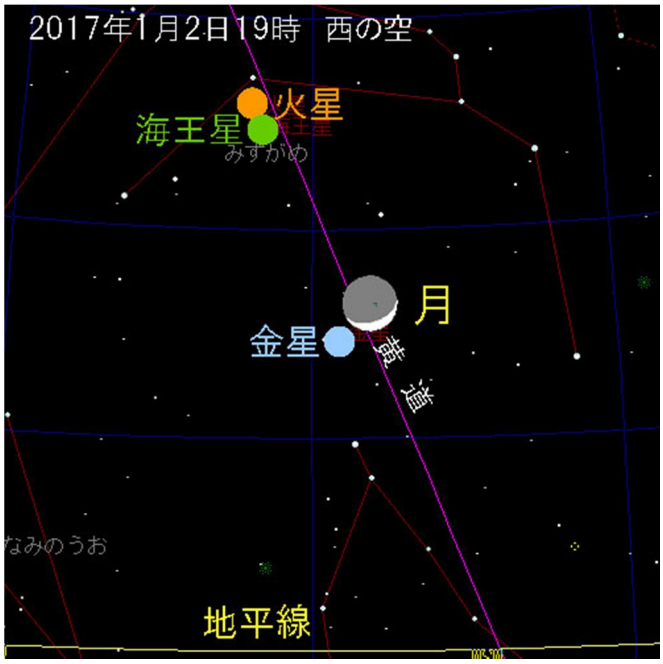
「日々の理科」（第 911 号） 2017（H29),-1,-3

「月と金星の接近」

お茶の水女子大学附属小学校　田中 千尋

このお正月は、さまざまな天文現象が多く、毎夕撮影に忙しかった。中でも１月２日日没後の「月と金星の接近」は美しく、誰もが見とれる光景だったと思う。



星図上の計算では、月はほぼ黄道（天球上の太陽の通り道）の上、金星は黄道よりも少し左側にずれている。“接近”といっても離角は 1.5°で、月の直径の３倍もある。月の黄緯（黄道北極からの角距離）がもうお少し大きい値だったら、金星は月のかげに隠れて「食」が起きていたはずだ。大変残念である。

金星は実視等級が-4 等と非常に明るいので、日没直後のまだ明るいうちからよく見えていた。

このように広角の写真で見ると、２つの天体の「大接近ぶり」がよくわかる。撮影地は埼玉県小川町で、右のとがった山が「笠山」（「か」にアクセント）、中央の平らな山が「堂平山」である。堂平にはかつて東京天文台の堂平観測所（天文台）があった。現在は、ときがわ町の観測施設として活用されている。

「接近」といっても、２つの天体の実距離が縮まったわけではない。この日の実際の距離は、地球・月間が約 39 万 km、地球・金星間は約 1 億 800 万 km と大きく違う。地球から見て、たまたま２つの天体が接近して見えた---というだけである。そんなロマンのないことを言ってはいけない。とにかく美しかった。